

企画展「吉田初三郎鳥瞰図展 大正・昭和に描かれた観光パノラマ絵図」 開催中



企画展「吉田初三郎鳥瞰図展 大正・昭和に描かれた観光パノラマ絵図」を、当館大ホールで9月1日(日)まで開催しています。
 当館が平成23年度に購入した吉田初三郎の鳥瞰図・絵はがき、および金子常光の鳥瞰図など、あわせて約250点を展示しています。また、本企画展開催にあわせ、常設展の各展示室に隠されている鳥瞰図を探し出す夏休み子どもイベント「初三郎の鳥瞰図を探せ！」も行ってまいります。開催期間は残りわずかとなっていますが、お時間がありましたらぜひ一度足を運んでみてはいかがでしょうか。(写真は8月11日(日)に当館小ホールで行われた種差観光協会会長 柳沢卓美氏による『吉田初三郎と青森県』講演会の様子)

企画展「山内博尚コレクション 美しき蝶の世界」



山内博尚氏が収集した海外の蝶、企画展「山内博尚コレクション 美しき蝶の世界」が6月7日から7月15日まで、当館大ホールで開催されました。期間中、校外学習による青森県内からの小学生の来館に加え、修学旅行による見学で北海道等からの児童も多く訪れました。子どもたちは、展示室いっぱいには並べられた多くの美しい蝶の標本に目を奪われている様子でした。また、6月10日には山内博尚氏ご本人も来館されました。大ホールで展示物をじっくりご覧になりながら、当館職員に当時のエピソードなどたくさんお話されたようです。(写真は6月10日に山内博尚氏が当館に来館時に撮影。右から3番目が山内博尚氏)

日本のアニメーション美術の創造者 山本二三展 TTHAグループ主催

～天空の城ラピュタ、火垂るの墓、時をかける少女～

日本のアニメーション美術の監督として数々の名作に携わってきた山本二三の仕事を紹介する展覧会。テレビアニメ「未来少年コナン」(1978)で初の美術監督をつとめ、高畑勲や宮崎駿の作品に美術監督、背景画制作で参加し、考え抜かれた精密な描写、感情豊かな風景表現で、人々を魅了してきた美術家の背景画のベストセレクションを一挙公開します。

「二三雲」と呼ばれる、輝きと表情豊かな雲の表現は、アニメーションの世界では広く知られています。「天空の城ラピュタ」(1986)、「火垂るの墓」(1988)、「もののけ姫」(1997)などで使われた背景画のほか、現場スケッチ、イメージボード、背景画等を展示、あわせて「時をかける少女」(2006)の背景画など、未公開作品をふくむ約180点を紹介します。子どもから大人まで人気の高い作品の背景画を鑑賞することができ、老若男女問わず楽しんでいただける内容です。

平成25年11月16日(土)
 ～平成26年1月13日(月)



時をかける少女(踏切) 2006年
 ©「時をかける少女」
 製作委員会2006 © 山本二三



当館解説員 S 作

秋の企画展・特別展・イベント情報

- ◆特別展「青森県立郷土館開館40周年記念 平尾魯仙」9/13(金)～11/10(日)
- ◆東北文化の日 10/26(土)～10/27(日) ※館内無料観覧
- ◆TTHAグループ主催「日本のアニメーション美術の創造者 山本二三展 ～天空の城ラピュタ、火垂るの墓、時をかける少女～」11/16(土)～1/13(月)
- ◆日専連青森主催「第23回 日専連全国児童版画コンクール青森地区選」1/25(土)～1/26(日)
- ◆「ミュージアム探検隊」12/15(月)までの土・日・祝日
- ◆「秋の自然観察会」10/6(日) ※事前申し込みが必要
- ◆「あおり街かど探偵団」10/20(日)・10/27(日) ※事前申し込みが必要
- ◆「解説案内」毎週日曜、祝日 午後2時から常設展を案内

総合博物館

青森県立郷土館だより

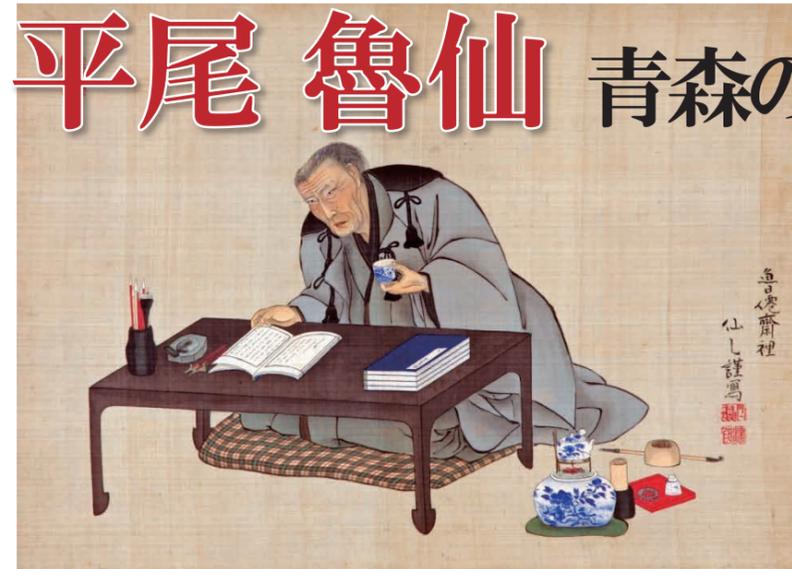
News from the Aomori Prefectural Museum

通巻157号 平成25年(2013)8月25日 Vol.44 No.2

特別展 青森県立郷土館開館40周年記念



平尾魯仙 青森のダ・ヴィンチ



工藤仙乙筆「魯仙肖像」(個人蔵)



魯仙使用の机(個人蔵)



魯仙『暗門山水観』より「魚留の滝」(当館蔵)

- 期間
9月13日(金)～11月10日(日)
- 場所
1階特別展示室(大ホール)
- 時間
9,10月 9:00～18:00
11月 9:00～17:00

- 観覧料
一般 500円(400円)
高校・大学 240円(200円)
- 中学生以下無料、障がいのある方は免除。

※()内は20名以上の団体料金および前売り料金。
 こちらの金額で常設展も観覧できます。

幕末から明治初期の北東北を語る時、弘前城下で多くの絵画を制作した平尾魯仙(ひらおろせん)は、忘れることのできない人物です。本名は亮致(すけむね)。その作品はレベルが高く、この時期の津軽画壇をリードする存在でした。三上仙年・工藤仙乙・山上魯山・山形岳泉・佐藤仙之など多くの優秀な弟子を育て、後世に大きな影響を与えました。

江戸や上方に出る機会がなかったため、全国には名を知られてはいませんが、活動の幅は広く、松前や箱館を旅したり、江戸の国学者平田家と手紙のやりとりをしたりしています。平田家の私塾「気吹舎」(いぶきのや)に入門し、熱心に国学を学んでもいます。若い頃から漢学・和歌・俳諧に親しんだ魯仙は、絵画のほかにも、多くの文章を残しました。よく「文章と絵画は切り離せない」「絵画でももの

かたちをつかみ、文章でその中身を理解する」と言っていました。そのように、身のまわりのことは何でも知りたい、描き残したいという欲求が、魯仙を支えていたのです。

今回は地元弘前を中心に残っている資料に加え、宮内庁書陵部『安門瀑布紀行』や東京国立博物館『草花図譜』や国立歴史民俗博物館『平田家資料』など、地元外の関係資料の借入が実現し、初公開の運びとなりました。絵画や学問に真剣に取り組み、誠実な人柄で人びとを魅きつけた魯仙。本展では、魯仙のマルチな才能がどのように培われ、どのように熟成していったかを紹介し、人間・魯仙の生きざまに迫ります。(本田 伸)



魯仙は子供の頃から絵に巧みで、周囲もその才能に驚くことが多かったといいます。12歳頃には、弘前の南画家・工藤五鳳に正式に師事しました。五鳳は魯仙の画人としての素質を見抜き、自分の師である毛内雲林に魯仙を託すことにしました。さらに21歳の時には弘前藩のお抱え絵師である今村慶寿にも学んでいます。魯仙は23歳で結婚し、家業の魚商をつぎ、いったんは画を描くことから遠ざかりますが、30歳の時に家業を弟に譲り、それ以後の人生は画業と文筆に専念することになりました。

平尾魯仙と画(絵)

魯仙の絵画に対する考え方を手立てとしては、魯仙が文化四年(一八〇七)に刊行した著作『画訣』があります。これは宮本君山の『漢画独稽古』を底本として著したのですが、そこには、「自分のまわりのあらゆることを書き写し、直してはまた写し、それを積み重ねていけば自然と自分の思うままに描けるようになる。」ということや、「著名な画人や、古画、諸々の画譜、画論などをできるだけ多く学ぶことによって、はじめて良い画がかけられるのである」と書いていて、魯仙自身がこれをそのまま実行していることは、現在、残されている多くの絵画作品や画帖、下絵などから伺いしれます。

本展では、屏風や軸などの絵画作品の他に、植物や鳥類など緻密な観察眼で描いた画帳や、魯仙の大著『幽府新論』の付録のひとつで珍しい動植物を描いた、現在の図鑑のような『異物図会』などを展示し、マルチな才能の持ち主であった魯仙の魅力をお伝えしたいと思います。(對馬 恵美子)



『異物図会』より「虫部一岩木山で目撃された虫」

特別展記念講演会

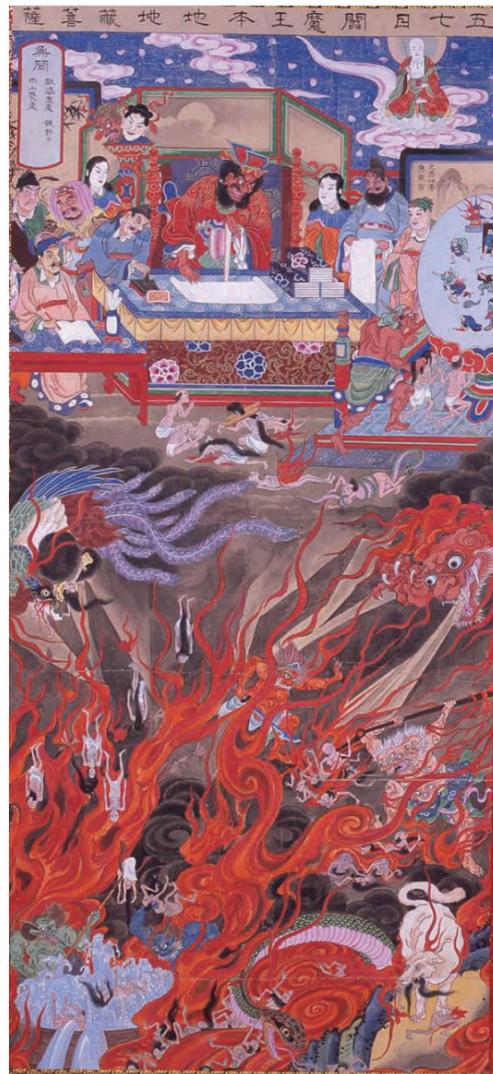
9月21日(土) 講師:早稲田大学 学術資料センター 中川 和明氏
平尾魯仙の学問と平田国学

特別展に関連のある土曜セミナー

- ◎9月14日(土) 講師:對馬 恵美子
平尾魯仙が描いた奇妙な絵
- ◎10月12日(土) 講師:本田 伸
平尾魯仙がみた幕末の箱館～「洋夷茗話」と「箱館紀行」～
- ◎10月19日(土) 講師:本田 伸
二つの「暗門山水観」～平尾魯仙が描いた暗門の滝～



「虎図」衛立 弘前市博物館 蔵



「十王図」より閻魔王 地蔵菩薩 高澤寺 蔵

土曜セミナー開催中です。

25年度の後期日程

5月から翌26年3月まで、毎週土曜日(年末年始を除く)の午後1時30分から当館小ホールにおいて開催しています。

青森県の歴史、文化、自然等に関するテーマを中心に、当館職員及びゲストキュレーターがわかりやすく解説します。

「あおり県民カレッジ」の単位として認められるほか、今年度からは「高校生スキルアッププログラム」の認定証取得をめざす高校生も受講しています。

後期の日程とテーマは右表のとおりです。興味があるテーマだけの受講も可能ですので、是非ご参加下さい。(竹村 俊哉)

参加料は無料です!

初めての方は、当日土曜セミナー受付で名前等を記入するだけで参加できます。もちろん、都合の良い回だけの参加でも構いません。



風韻堂コレクション 県重宝 亀ヶ岡遺跡出土品 特別公開

風韻堂コレクションは、郷土史家佐藤公知氏とご子息の大高 興氏が親子二代にわたって収集した考古資料で、その数約11,000点にのぼります。その中には県重宝に指定された亀ヶ岡遺跡出土品が62点あります。今回、県重宝亀ヶ岡遺跡出土品のうち、赤漆塗浅鉢形土器、赤漆塗壺形土器、漆入り鉢形土器、翡翠製勾玉、丸玉など27点を特別に公開しました。そのうち漆塗り土器は土器の表面に漆を塗り重ねたものです。縄文時代の漆技術の高さを現し、亀ヶ岡文化の代表的なものとして位置づけられています。特に彩文漆塗り浅鉢形土器や赤漆壺形土器は、美術品としても高く評価されています。また漆入り鉢形土器は、土器の中には固まった漆があり、木から採った樹液を入れたと考えられ、状態から数回にわたって樹液を入れたと思われます。縄文人の漆利用を復元するうえで貴重な資料です。公開は8月7日まででしたが、漆入り鉢形土器は引き続き常設展示で公開します。是非ご覧下さい。

(伊藤 由美子)

風韻堂コレクション展示室は1階大ホール入り口付近にございます。来館された際には気軽にお立ち寄りください。



漆入り鉢形土器



彩文漆塗浅鉢形土器